

② 応答詞と終助詞からわかること

遠藤 織枝

I-1 応答詞の使い方

問いや呼び掛けに応じて答える際にまず発する「はい」「いいえ」などの応答詞の使われ方に、ことばの丁寧度をみる研究が井手祥子氏らによって報告されている（『女性の敬語の言語形式と機能』）。

今回の共同研究でも、インタビューに答えるゲストの女性たちの応答詞の使い方を、用語の丁寧度をみる尺度の一つとしてとりあげる。今回採取した応答詞は肯定で、①はい、②はあ、③ええ、④え、⑤うん、⑥うーん、否定で、⑦いえ、⑧いいえ、⑨いや、⑩いやあ、であるが、音声面での強弱、長短が、文字化する際厳密に写し取れているか疑問も残るので①と②、③と④、⑤と⑥、⑦と⑧、⑨と⑩を同一語とみた。つまり、①はい、②ええ、③うん、④いえ、⑤いや、の5語として扱うことにし、丁寧度の順位は井手氏らの報告と同じく、肯定では丁寧度の高いものから、①はい、②ええ、③うん、の順、否定では、高い順に①いえ、②いや、として進めていく。

まず、それぞれのインタビューでの応答詞の使われ方を調べてみる〔表1〕。

I-1-A 肯定の応答詞

ケースごとのインタビュアー（I）とゲスト（G）による使われ方は、単に使用回数だけでは比べられない。それぞれのケースのIとGにより話される文の数が異なるので、全文数に対する割合でみなければならない。

「はい」を最も多く用いているのはケース13の30代後半のゲストである。インタビュアーの男性の方で最も多く「はい」を用いているのはケース20の60代前半の女性との応対である。

「ええ」は、ゲストではケース3の20代後半女性に、インタビュアーではケース16の40代後半の女性との応答の際に最も多く使われている。

「うん」はゲストではケース18の50代前半の女性、インタビュアーは同じくケース18のゲストとの応対で最も多く用いている。

(表1) 応答詞の使われ方

	文数		応答詞																					
	I	G	はい				ええ				うん				いえ				いや					
			I	G	使用数	対比文数(%)	I	G	使用数	対比文数(%)	I	G	使用数	対比文数(%)	I	G	使用数	対比文数(%)	I	G	使用数	対比文数(%)		
ケース1	155	143	6	3.9	11	7.7	0	0	1	0.7	5	3.2	1	0.7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	74	76	2	2.7	3	3.9	1	1.4	6	7.9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3	106	166	1	0.9	5	3.0	1	0.9	26	15.7	0	0	3	3.6	0	0	3	3.6	1	0.7	0	0	1	0.8
4	86	132	2	2.3	9	6.8	1	1.2	10	7.6	0	0	0	0	0	0	3	3.6	0	0	3	3.6	0	0
5	58	79	0	0	3	3.8	0	0	1	1.3	0	0	1	1.3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6	67	173	6	9.0	8	4.6	3	4.5	6	3.5	3	4.5	2	1.2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
7	70	108	3	4.3	12	11.1	3	4.3	5	4.6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
8	61	80	2	3.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3.8	0	0	1	1	1	2
9	82	114	1	1.2	9	7.9	0	0	9	7.9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	1
10	61	69	0	0	7	10.1	2	3.3	6	8.7	1	1.6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
11	83	121	0	0	2	1.7	0	0	4	3.3	3	3.6	2	1.7	0	0	2	2	2	2	2	2	2	2
12	12	104	3	2.7	7	6.7	1	0.9	11	10.6	1	0.9	1	1.0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
13	98	129	1	1.0	17	13.2	0	0	20	15.5	0	0	1	0.8	0	3	3	3	3	3	3	3	3	5
14	64	83	0	0	2	2.4	1	1.6	11	13.3	1	1.6	4	4.8	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
15	85	139	0	0	2	1.4	2	2.4	12	8.6	0	0	4	2.9	0	1	0	0	0	0	0	0	0	5
16	55	81	5	9.1	6	7.4	3	5.4	5	6.1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
17	68	122	0	0	1	0.8	0	0	6	4.9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
18	54	131	3	5.6	10	7.6	1	1.9	9	6.9	4	7.4	7	5.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
19	47	128	0	0	0	0	0	0	4	3.1	0	0	3	2.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
20	46	106	9	19.6	4	3.8	2	4.3	13	12.3	2	4.3	2	1.9	0	3	3	3	3	3	3	3	3	4
21	63	80	0	0	5	6.3	0	0	5	6.3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
22	77	135	2	2.6	10	7.4	0	0	3	2.2	1	1.3	2	2.2	0	2	2	2	2	2	2	2	2	4
計			46		133		21		159		21		36		4	21		4		4		4		38

この3語は同一人物が、それぞれ混ぜて用いているのがほとんどであるが、22人の話者の中でどの語を多用しているか、その順位により丁寧度をはかることができるので、ケースごとに3語の順位をみることにする。

使用回数の多い順から並べて、

- A (1)はい、(2)ええ、(3)うん：ケース6・7・10・16・18の5人
- B (1)はい、(2)ええ、(2)うん（「ええ」と「うん」が同じ回数）：ケース1・5・22の3人
- C (1)はい、(1)ええ、(3)うん（「はい」と「ええ」が同じ回数）：ケース9・21の2人
- D (1)ええ、(2)はい、(3)うん：ケース2・4・12・13・20の5人
- E (1)ええ、(2)はい、(2)うん（「はい」と「うん」と同じ回数）：ケース11・17の2人
- F (1)ええ、(2)うん、(3)はい：ケース14・15・3・19の4人
- G (1)うん、(2)はい、(2)ええ：ケース8

3語のうち「はい」を最も多く使うのがA～Cの場合で10人、「ええ」を最も多く使うのがD～Fで11人、「うん」が最も多いのがGで1人（この人は、「うん」しか使っていない）となっている。

また、22人の応答詞の数を全部集計してみると「はい」133回、「ええ」159回、「うん」36回で使用回数でみても「ええ」が最も多く使われている。

今回の22人の女性の談話では、丁寧度では2番目の肯定の応答詞が最も多く使われていたといえる。

なお、「『はい』のぞんざいな言い方」（『新明解国語辞典・第3版』）とされる「うん」が36回、肯定の応答詞中11%の割合で使われていたことは、しかも、それがテレビ番組の中のインタビューに答える中という、なかば公的な場面で使われていたということは、最近の女性の話しことばのひとつの傾向を示していると思われる。つまり、女性たちのことばがぞんざいになっている、言いかえれば、必要以上に丁寧でなくなっているということである。

インタビュアーである男性の場合は、ゲストに問いかけ答えを求める立場だか

ら、応答詞の使われ方はゲストより少ない。また、ゲストとして迎える側の応答であるから丁寧な待遇をしている。その結果インタビュアーの肯定の応答詞では「はい」が最も多くなっている。

I-1-B 否定の応答詞

「いえ」と「いや」の2語であるが、ゲストでは「いえ」36%、「いや」64%と、丁寧度では低いとされる「いや」の方が多く使われている。

インタビュアーの方は「いえ」「いや」とも4回ずつしか使われていないが、同数ということで、ゲストより丁寧度の高い語が使われていることになる。

なお、肯定に比べると、否定の応答詞の使われ方は極めて少ない。問われ方、問われる内容にもよるが、ゲストの中には一度も否定の応答詞を使っていない人が、ケース1・2・5・10・12・18・21の7人いる。

全体の使用回数で肯定、否定の応答詞は、ゲストの場合328回対59回、84.7%対15.3%、インタビュアーの場合は88回対8回、91.7%対8.3%である。

日本人は“NO”を言わない(“NO”が言えない)とはよく言われるが、ここでもその傾向は見られる。ゲストである女性の方が男性インタビュアーより高い比率で“NO”を用いていることは、ゲストとインタビュアーの役割の違いに影響をうけていることを重視した上でなお、現代の女性の話しことばの傾向を示唆するものがあると思われる。

II 文末の実態

ここでは、談話の各文が終えられるとき、動詞、助動詞などの終止形で止めるか、終助詞またはそれに相当するものをつけるか、つけられる場合は、どのようなものが、どのようにつけられるかを探る。

終助詞「ね」は相手に同意を求める意味で使われることが多い。「よ」は自分の主張を相手に伝える意で使われることが多い。この2語を比べると、相手への接近を、同意を求める形で行うのと、自己の主張をおしだしながら行うのとの違いがある。そこに相手への待遇の違いがみられ、丁寧度でも差が出てくる。「ね」の方が「よ」より丁寧な言い方というわけである(「ね」「よ」の意味は本来異

なるから同列に比べられない、ともいえるが、「『ね』を使う表現」「『よ』を使う表現」としてなら比べられる)。

言い切りの場合は、終助詞をつけず言い切る、ということで丁寧度において終助詞をつけた表現より低い、とみることもできる。

〔例2〕 だからふつうにやってるし、親子関係もうまくいってるし、ふつうにやらせてたんです。

〔例3〕 ちゃんと塾にはほうりこんでたんですよね。

の2例でみた場合、〔例2〕は相手への接近はなく単に事実として述べているにすぎないが、②では「～よね」と、相手に理解や同意を求める働きかけの「ね」を用いて接近している。きき手にとっては①は中立的だが、②では話し手が自分の方へ近づいてきたという意味で受け手から厚く遇せられることになる。

II-1 言い切り文の使われ方

言い切りの形を用いるということは、相手の理解や同意を求めなくてもかまわない、という自信の表われとなり、結果として相手を突き放す表現となる。相手への接近→すりより→おもねり→依存、という系列は断ち切れ、相手がどう思おうと事実はこちらだ、自分はこうなんだ、という強さが表われる。

この言い切りの形の使用頻度は、当然のことながら、個性の差であり、人によって大きく異なる。各ゲストの言い切り文の数と、個々のゲストの全文(応答詞だけの文は除く)に対する比率を求め表にしてみる(表2)。

ゲストの場合、言い切り文が最も多く使われているのはケース22の70代後半のフィルム編集者で、最も少ないのはケース8の30代前半の映画製作者である。

10%ずつに区切ってみると、

0%～10.0% ケース8

10.1%～20.0% ケース6・7・20

20.1%～30.0% ケース4・5・10・14・13

30.1%～40.0% ケース1・2・3・9・11・15・16・17・19・21

40.1%～50.0% ケース12・18・22

となり、10文のうち3～4文は言い切り文という人が最も多いことになる。ま

(表2) 言い切り文の使われ方

	文 数		言 い 切 り 文			
	I	G	I		G	
			使用数	対全文比	使用数	対全文比
ケース 1	144	118	39	27.1	45	38.1
2	71	66	14	19.7	22	33.3
3	103	112	22	21.4	36	32.1
4	83	109	29	34.9	32	29.4
5	57	72	11	19.3	19	26.4
6	55	150	14	25.4	23	15.3
7	64	83	14	21.9	14	16.9
8	58	74	9	15.5	7	9.5
9	81	93	20	24.7	34	36.6
10	58	56	17	29.3	16	28.6
11	78	111	21	26.9	37	33.3
12	106	85	17	16.3	39	45.9
13	97	77	19	19.6	23	29.9
14	61	67	19	31.1	18	26.9
15	83	113	23	27.7	35	31.0
16	46	66	11	23.9	26	39.4
17	68	113	19	27.9	44	38.9
18	46	103	13	28.3	45	43.7
19	47	119	10	21.3	42	35.3
20	33	86	4	12.1	17	19.8
21	63	70	7	11.1	25	35.7
22	74	113	15	20.3	54	47.8
計	1,576	2,056	367		653	

た半数以上の人が10文中3文は言い切り文を用いているということになる。

男性インタビュアーの場合は、22のインタビューの全文数と言い切り文数を総計して比を出してみると、1,570文に対し367文で全文中23.3%が言い切り文である。

ゲストの場合個人差があり9.5%～47.8%と開きがあったが、これを女性全体として平均してみると言い切り文の使用率は31.8%になる。

インタビュアーとゲストと立場が異なるから、単純に比較することはできないが、男性インタビュアーの言い切り文使用率23.3%に対し女性ゲストのその平均が31.8%というのも、女性の話し方の丁寧度が男性のそれより高いとは限らないことの一つの証明にはなろう。

また、男性側のデータは同一インタビュアーによるもので、男性側を代表するには偏りがあるとも考えられる。そこで、他の男性の談話資料として『日本人の知識層における話しことばの実態』（国立国語研究所 1980）に登場する2人の男性の資料とも照らし合わせてみた。この2人の男性の談話の場合は研究室内でのもので、インタビュー番組とは場面が異なるが一応参考にして比較してみる。

	文数	言い切り文	対文数比
男性A	70	21	30.0%
男性B	120	25	20.8%

インタビュアーF氏の23.3%は、A、B2人のちょうど中間に位置するので、F氏を男性の代表とみて女性ゲストと比較してもそれほど大きな誤りはなさそうである。

この文末形に関するかぎり、女性の方が丁寧なもの言いをする、という従来の説とは逆の結果を得たわけである。

II-2 終助詞による丁寧度の差

終助詞の機能について、佐久間鼎は次のように述べている。

言語の演述機能に対してはほとんど何らの役目を果たさないで、むしろ表情的効果ならびにもっぱら話相手にアピールするというビューレルの『アペル』（うったえ）の機能を発揮するものです。つまり、話し手の話の場にのぞむ（対

人的)態度を表明するものに外ならないわけです。(『現代日本語の研究』くろしお出版 1983)

まさしく、終助詞は相手に対する態度を表示する語で、だからこそ、この使い方で、相手への近さ、親しさ、なれなれしさ、といった、待遇の表われになり、この終助詞の使われ方から話者の相手に対する待遇の丁寧度をはかる尺度になりうるのである。

また、井手祥子氏は男女の終助詞の選び方が異なるものをいくつか挙げ、「わ」「のよ」は女性の発話、「よ」「な」「ぜ」は男の発話として次のように説いている。

「わ」は尻上りのイントネーションで話されるものだが、これを使うと、まず主張が弱められる。一般に尻上り調ということは相手にお伺いを立てる調子になるのでソフトなニュアンスをもつ、一種の甘えを示し、やさしさや可愛らしさを出す。

「のよ」は「の」が付け加わったために女の文末表現となったものである。「の」は話し手が言おうとすることを聞き手と共有していることを訴えるように話す表現となる。「よ」がその後につけられ、主張する表現となっているものの、「の」が付くと女の発話になるのは聞き手との共感を引きおこそうとする力がこの「の」にあり、これも話し手が聞き手と相まみえんとしようとする一種の甘えを示すもので、可愛らしさの表現となっている。

これら女の使う終助詞にくらべ、男の使う終助詞はソフトな表現とは言い難い。「よ」は話し手が主張しているのだ、という意味を加える終助詞で、「ぜ」はそれをさらに強く、威張った男のニュアンスをこめたものである。「な」は「ね」と同様相手の同意を求めるものだが、「ね」と異り、突き放したような態度を示しているようである。

これらの男の終助詞はいずれも話し手が自分を押し出したり、話し手と聞き手との間をはっきりさせ、「個」が強調されるものだが、女の終助詞「わ」はその反対に自分の感情を吐露し、「の」は言うことを聞き手と共有することにより聞き手と相まみえんとするものである。(『女らしさの言語学』『講座日本語の表現3 話しことばの表現』筑摩書房 1983)

この他、終助詞の用法の男女の区別を述べたものに『日本文法大辞典』（明治書院 1984、以下『文法』と略記する）があり、同書から区別があるとされた終助詞をぬきだしてみる。

ね 男女間に相違がある。男性語では文につく。女性語は「わ」を介する。

よくしゃべるね（男）

よくしゃべるわね（女）

な ①感動・詠嘆。②願望を表す。③軽く断定したり主張したりする気持ち。
④同意を求めたり返答を誘ったりする。⑤命令をやわらげ、誘うような調子をそえる。①-④の意味で使うのは男、⑤は女。

の 断定表現に用いられ、その語調がやわらげられる。現代語ではもっぱら女性が用いる。

よ 強調の意味を表わす。断定、言いをはる言いきかせる気持ちで念を押す。

①活用語終止形

男 直接つく。行くよ。朝だよ。

女 「わ」を介する。ただし「ます」「です」「ございます」などには直接つくこともある。行くわよ。朝だわよ。（以下略）

女性が男性語的な接続で「よ」を使用すると品の悪い感じ、あるいは方言的な感じを与える。

わ 女性が使う。やわらかな感じを与えながら、軽く主張したり、ほんとうにそうだという気持ちをそえる。

また『現代語の助詞・助動詞』（国立国語研究所 1980）で女性／男性専用の助詞とされたものに次のようなものがある。

女性専用

- のよ だから嫌になっちゃふのよ。
てよ …二月ごろまではたっぷりかかってよ。
ことよ 男らしくないことよ。
わよ 豊子ちゃんが泣いてゐたわよ。
わ はっきりお断りするわ。
わね(え) 出ても長男だから困るわね。

男性専用

- な (同意を求めるまたは相手の返答を誘う) 結構なお天気でございます
な。はてな、この辺に逃げたんだが。
ぞ おい、あれは吉岡だぞ。

以下、個々の終助詞について今回のインタビュー番組のゲストとインタビュアーの使い方をみていく。

II-2-a 「ね」

終助詞でどの話者にも最も多く使われているのが「ね」「ねえ」である。音調、長短、強弱などで意味合いは異なるものもあるが、相手へ向かって発せられていることにはかわりない。

[例4] G わたくしは、特性とかね適性とかね、そういうものでこうわりふられていくようなことがあれば…

のように文中にも「ね」は使われるが、これらは間投助詞として別のものと考え、文末にくるものだけを考察の対象とする。

文の数とそれらの文の文末に「ね」が出現する数の比で出現率の個人差をみる。

(表3)

10～19.9%	ケース 17
20～29.9%	ケース 7・18・19
30～39.9%	ケース 3・4・5・11・12・16・21・22

(表3) 「ね」「よ」の使われ方

	ね			よ			よ			よ			よ+よね			な		
	I		G	I		G	I		G	I		G	I		G	I		G
	使 数	対比 支 %	使 用 数	対比 支 %														
ケース1	22	15.3	51	43.2	1		1		2		2		3	2	0	4		
2	23	32.4	27	40.9	1		1		4		0		5	0	0	15		
3	17	16.5	41	36.6	0		5		3		8		3	13	2	8		
4	22	26.5	36	33.0	1		7		3		6		4	13	1	6		
5	14	24.6	26	36.1	2		1		2		0		4	1	2	4		
6	10	18.2	62	41.3	0		21		1		6		1	27	0	10		
7	7	10.9	24	28.9	0		5		0		3		0	8	0	4		
8	11	19.0	37	50.0	0		0		1		3		1	3	1	4		
9	22	27.2	48	51.6	0		4		2		1		2	5	1	4		
10	13	22.4	31	55.4	0		2		0		6		0	8	0	6		
11	16	20.5	40	36.4	2		2		2		1		4	3	1	6		
12	37	34.9	28	32.9	0		0		4		5		4	5	1	1		
13	24	24.7	37	48.1	0		0		3		2		3	2	1	3		
14	10	16.4	27	40.3	1		4		0		5		1	9	2	9		
15	17	20.5	51	45.1	0		4		6		3		6	7	0	2		
16	10	21.7	20	30.3	0		1		2		1		2	2	0	1		
17	19	27.9	20	17.7	0		11		1		1		1	12	0	4		
18	7	15.2	26	25.2	0		8		0		2		0	10	0	12		
19	15	31.9	27	22.7	0		7		2		4		2	11	0	2		
20	11	33.3	30	44.2	0		6		1		1		1	7	2	7		
21	17	27.0	26	37.1	1		1		1		0		2	1	0	1		
22	14	18.9	34	30.0	0		7		2		2		2	9	2	4		
全文					9		97		42		62		51	58				
I 1,576					0.6%		4.7%		2.7%		3.0%		3.2%	7.7%				
G 2,056																		

40～49.9% ケース 1・2・6・13・14・15・20

50～59.9% ケース 8・9・10

いちばんよく使う人で55.4%、少ない人で17%で、多い人は全ての文の半分に「ね」をつけて話していることになる。

インタビュー어의男性では最も多いのはケース12のゲストとのやりとりで34.9%、少ないのは、ケース7のゲストを迎えた際の10.9%である。全体の平均でも女性ゲストたちよりインタビューーF氏の「ね」の使用率は低い。F氏は問いかける側であるから当然でもある。なお、『日本人の知識層…』の2人の男性の「ね」の使用率は45.7%と58.3%で、これらを考えると「ね」の使用の男女差があるとは断言できなくなる。

具体的にどのような文末に使われるかをみると、

〔例5〕 行きたいと申しましてね。

〔例6〕 お世話になりましたね。

〔例7〕 二代目でしょうかね。

〔例8〕 少しも変わらないしね。

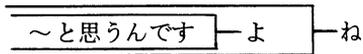
〔例9〕 見守ってくれるみたいね。

などがある。〔例7〕〔例8〕〔例9〕などは、『文法』では女性は使わない形とされるような使い方である。『文法』には、「ね」が助詞「か」に接続して、「そうかね」のように言う場合、女性は「か」に「ね」を接続させないで、「『そうかしら』などという」と記されている。〔例7〕のようなのは男性の用法ということになる。

II-2-b 「よ」

終助詞「よ」は話し手の主張を相手に伝える役割をもつもので、井手氏もそのゆえに男性のものとされている。しかし、今回の調査では、女性の使う「よ」も多数採取している。文末に終助詞「よ」を用いるものと、「～よね」の形で文末の「ね」の前に「よ」を加えたものがある。この「～よね」は、

〔例10〕 最後の場所だと思うんですよね。
のように使われるもので、図示すると、



のような関係で、最初「思うんです」の事実を相手に主張としてつきつける終助詞の「よ」の働きをし、その主張を含めて、相手に同意を求める「ね」を用いている。したがってこの「ね」の前の「よ」も、「よ」の用法の一つとして考えることにする。「よ」と「よね」の使われ方を(表3)に示す。

「よ」の使用率は女性ゲスト達の方がはるかに多く、「よね」は男性インタビュアーと女性ゲストの使用率が接近している。「よ」と「よね」を合わせたものでは女性ゲストたちは男性インタビュアーの倍以上の使用率を示している。

「よ」は、

〔例11〕 もう元気なんですよ。(ケース22)

〔例12〕 お若いんですよ。(ケース21)

など「です」「ます」の文末につくものがほとんどで『文法』で男性が使うとされる「行くよ、来いよ、静かだよ、するなよ」などの使い方の例はない。一方、同書で女性が使うとされる「行くわよ、静かだわよ、しないでよ」などの形もみあたらない。

「よね」は『文法』の「ね」の用法として助詞「よ」に女性のことばは接続し「今日よね」のように使うが、男性の場合は接続しないとされている(p.644)。

しかし現実にはF氏は、

〔例13〕 アンドレの帽子という作品ですよね。(ケース12)

のようにいくつも使っている。

『文法』に男女の使い分けを示したものは、現在ではかなり中性化していると思われる。

相手に対する主張を明確にするため、女性は使わないとされた「よ」が全文数の7.7%で使われていることも、女性が主張をはっきりさせる言い方をするようになったという女性のことばの使い方の変化の流れを示している。

II-2-C 「な」

終助詞「な」の使われ方として、

〔例14〕 …アジアの子供たちとかそういうもの、やりたいなあ。(ケース19)

〔例15〕 通らなかつたかな。(ケース4)

〔例16〕 やってみたいなと強く思った…(ケース10)

〔例17〕 そういうところを撮りたいなあと思って…(ケース20)

のような例を採取している。「な」と「なあ」については「なあ」の方が詠嘆の意が強いとして別語扱いするべきかもしれないが、音声上の違いを厳密に文字化していない部分があると考えられるので、今回は「な」系統語として同じものとして扱う。『文法』には〔例14〕〔例15〕のように文末で言い切りの形の「な」「なあ」については言及があるが〔例16〕〔例17〕のような文中で引用の形で示されているものには触れられていない。ここでは引用文として言い切り文の文末と同じに扱うことにする。『文法』には〔例14〕～〔例17〕のような「な」は男性が使う、とされ、井手氏も男性のものとしておられる。

ところが実際は、表3のように22名の女性が全員1～15回使っている。

インタビューする側の男性はゲストとは立場の違いもあるが、11人とのインタビューで使い、同数のインタビューで使っていない。

『文法』には男の「な」はあまり目上には使わない、女の「な」（「これ、くださいな」のような「な」）も親愛を表わすので、あらたまるところでは使わない、とされている。ゲストである女性たちが「な」をよく使っているのは、インタビュアーに対してあらたまらず、うちとけた気持ちでインタビューに応じているからであろう。

インタビューする側は、相手を話しやすくさせ、話題をひきだすことが中心的役割なので、本人の詠嘆、感動を表わす「な」が使われないのは当然である。

しかし、相手となるゲストにより全く「な」を使わない場合と1～2回使っている場合とある。全く使っていないのは相手のゲストもあまり使っていないからかどうか。ここで、両者間の影響の有無をみでみる。

A ケース	1	2	6	7	10	15	16	17	18	19	21	計	平均
I	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
G	4	15	10	4	6	2	1	4	12	2	1	61	5.5
B ケース	3	4	5	8	9	11	12	13	14	20	22		
I	2	1	2	1	1	1	1	1	2	2	2		
G	8	6	4	4	4	6	1	3	9	7	4	56	5.1

Aは、インタビュアーが「な」系統の終助詞を全く使わない場合、Bは1～2回使っている場合である。AとBでゲストの側の「な」系統語の使用に差は出ていない。ゲストの使用状況の多少にかかわらず、インタビュアーは使ったり使わなかったりして影響はうけていないかにみえる。

ただし、次のような例も存在する。

【例18】G そういう芸術家がいればいいなと思ってすごく一生懸命探したんですけど（後略）

I ああ、そうですか。いたらいいなあと思って。（ケース3）

【例19】G カメラとうまくいってないなあとかねえ、すごくしゃべりかけてくるんですね。

I はあ、そうですか。うまくいってないなあって感じがしたときに気合いが入りますか。（ケース22）

のように、ゲストのことばをそっくり受けついで「な」系統語も使っているのがある。

これらの場合は相手の影響をうけて「な」系統語を用いているのは明らかであるが、全体としては上記A、Bの数値でみる限り影響はあまりないことになる。

なお、「な」系統語が、多少の差はあれ、20代から70代までの女性22人全員に使われていることから、『文法』の、この語が男性のものであるとする記述は実情に合わなくなっていることが明らかである。

II-2-d 「わ」「かしら」「のよ」「もの」「の」

女性専用の終助詞とされるいくつかの語の今回のゲストたちの使用状況はどうか。

「わ」

『文法』では女性が使うとして、「ちがうわ。絶対ちがうわ」などの例があげられているが、今回の22人の談話の中にはこの種の言い切りの「わ」は1例も使われていない。「ね」を伴った「～わね」の例が2例ある。

〔例20〕 お天気の都合なんかでどこ撮るかわからないですわね。

(ケース22)

〔例21〕 それはそれでうれしいですけど、懐かしいわね。(ケース18)

このような使い方は「わからないですわ」「懐かしいわ」と「わ」で終えるのと比べると、ないですわ／懐かしいわの上がり調子ではなく「ね」でおさえているので、女性だけでなく使われる。現にインタビューアの男性も使っている。

〔例22〕 からだ全体が楽器みたいなものでしょうから、そういう意味では気を使いますわね。(ケース3)

つまり、女性専用とされる「わ」の使用例は今回の談話からは1例も特集されていないことになる。

「かしら」

『文法』には「主として女性が使う」とされ、日本語教育の教科書では男性の「～かな」に対比する女性の語として「～かしら」を並べて紹介しているものもある。

今回の談話では4例採集している。

〔例23〕 ああ、これはあそこでロケしてた時かしら。(ケース4)

〔例24〕 あの何と言うのかしら、一人でも動けるバンドがなくてもとか、カラオケで歌うとか。(ケース14)

〔例25〕 やったという自分の気持ち、自己満足してるような感じじゃないですかしら。(ケース22)

〔例26〕 私は女らしくなりましたかしら、なんて、ないですね。ちっとも。

(ケース14)

〔例26〕は「かしら」をわざと使って女性らしくなったかどうか相手をためすような、少しふざけた使い方である。文末にくる、例23～25とは趣きを異にする。モーターバイクのラリーに出場している女性のことを話している文の中で使われ、一般に女性らしくないと思われるライダーの女性が、わざと「女らしさ」を示すためにふざけて用いた「かしら」である。「かしら」が特に女らしさを表わす語だとされていることを逆手にとって、喜んでいるのであって、この女性が普通の談話文の中で用いているものではない。

他の3例は文末に用いられ、いわゆる女性専用とされる用法である。しかし、22人中3人にしかそれも1回ずつしか使われていない。また、この語は「あれはいつでしたかしら、…だったと思います」(’89. 12. 23 NHKラジオ AM11:20 村上陽一郎氏)のように最近では男性の使う例も耳にしている。このような状況の下でも女性語として強調しなければいけないのか、疑問に思うところである。

「の」「のよ」

「の」は1例だけあって、

〔例27〕あの、ちょっと手伝いましたの。(ケース21)

がある。F氏にも1例ある。

〔例28〕ぼくはね、のべつなしにしゃべっているの。病気なんじゃないかと思っています。

女性ゲストは「ました」に「の」をつけ、男性インタビュアーは「いる」に「の」をつけていて、敬体と常体の違いはある。

「のよ」の例は1例もない。井手氏のいわれる「聞き手と共有し相手と相まみえんとする女性」は今回の22人の中には1人もいなかったということになる。

— おわりに —

以上、応答詞における丁寧度の男女差と終助詞の使い方と丁寧度の関係を、主として男女差があるとされる終助詞でみてきた。応答詞では中程度の丁寧度の語を用いる女性が多いことがわかった。また、従来男性専用のものとされている終助詞を女性が多く使い、女性専用のものとされた終助詞を女性ゲストたちがほと

んど使っていない例に多く出会った。

男性専用といい、女性専用という際の話しことばをどのような場面、どのような談話のものか、明確にした上での名づけではないので、比較の対象として適当であったかどうかかわからないが、文法事典などでそう明記してある以上、比較の対象としうるであろう。

今回のテレビのインタビュー番組の女性の話しことばでみるかぎり、応答詞と終助詞の面で女性がそれほど丁寧な語は使わず、その用法に男女差はあまりみられないといえる。日本語教育の初級で「だな↔かしら」「だよ↔わよ」など男女の使い分けを教えるテキストがいくつかみられるが、基本文型の短期間のマスターを目標とする初級の時期に、この種の終助詞の使い分けの練習までさせる必要があるかどうか、疑問となるところである。

<参考文献>

- 『現代語の助詞・助動詞』 国立国語研究所 秀英出版 1951年
『^{古典語}現代語 助詞・助動詞詳説』 松村 明編 学燈社 1969年
『現代語法 助動詞・助詞』 丸山和雄・岩崎摂子 笠間書院 1976年
『講座 日本語4』 岩波書店 1977年
『日本語講座1 日本語の姿』 金田一春彦編 大修館 1976年
『講座 言語3 言語と行動』 南不二男編 大修館 1979年
『講座 日本語の表現3 話しことばの表現』 水谷 修編 筑摩書房
1983年
『日本人とアメリカ人の敬語行動』 井手祥子他 南雲堂 1986年
『敬語』 大石初太郎 ちくま文庫 1986年
『敬語を使いこなす』 野元菊雄 講談社現代新書 1987年
『敬語』 南不二男 岩波新書 1987年